

京都大学	博士(文学)	氏名	本 廣 陽 子
論文題目	『源氏物語』と『うつほ物語』 — 形容詞を中心とした表現の研究 —		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>源氏物語は、その構成や物語技法のみならず、文体や表現においても、それ以前の作品には見られない独創性を持つ。ただし、その独創性も、無から生み出されたわけではないであろう。源氏物語が書かれた時代には、多くの物語や、日記、和歌、漢詩文などが存在し、源氏物語を生み出すべく、その文化的土壌は整っていた。この土壌の上に、作者紫式部のたぐいまれな才能によって、源氏物語はこの世に誕生したのである。</p> <p>本論文は第一編と第二編よりなる。第一編は、源氏物語の形容詞に注目して、言葉と文体という二つの観点から、源氏物語の文章の独創性を明らかにしたものである。第二編は、形容詞・形容動詞を手がかりとして、それを直接・間接的に取り上げることで、源氏物語を頂点とした平安の文章史の流れの中で、従来見落とされていたうつほ物語と源氏物語の親近性を明らかにし、うつほ物語の文章を再評価する試みである。</p> <p>第一編において、源氏物語で用いられる形容詞の多さとその種類の豊富さに着目した。源氏物語の叙情的で、しかも、人々の心情を的確に表現し、多くの登場人物を、容貌や性格を含めて描き分ける文章の背景には、豊富な形容詞の使用があったと思われる。さらに、作者紫式部は、既存の形容詞を用いて、そこに少し変化を加えることにより、新しい表現の方法を編み出した。それが、第一章第二章でとりあげた接頭語を冠する形容詞であり、また、第三章でとりあげた接尾語「さ」を付けて名詞化した語であったのである。本編では、いずれの章においても、始めに数量調査を行い、源氏物語以前にどのような語が見られ、源氏物語で初めて見られる語は何かを明らかにする方法をとった。すなわち、第一章では、接頭語「もの」を冠する形容詞について、第二章では、接頭語「なま」を冠する形容詞について、第三章では、形容詞・形容動詞の語幹に接尾語「さ」をつけて名詞化したものについて、どのような語が源氏物語で初めて用いられるようになったかを明らかにした。その後、特に、源氏物語に特徴的な語を中心に、それぞれの例を個別に解釈するという方法をとった。数量的な見地からの分析と、個別の解釈を通しての考察を合わせることにより、それぞれの語について、作者紫式部が、源氏物語を書くにあたり、それ以前の作品の何を継承し、何を新しく生み出したかを、客観的かつ具体的に明らかにした。</p> <p>第一編第一章において、源氏物語に多く見られる接頭語「もの」を冠する形容詞は、源氏物語において、語彙の面でも意味の面でも、また用法の面でも大きく変化し拡大</p>			

していった語ではないかと考えた。そこで、源氏物語と、それ以前に見られる「もの」を冠する形容詞を、情意性形容詞と状態性形容詞に分けて考察した。そのことにより、源氏物語において、特に状態性形容詞の「もの」を冠する形容詞が多数創出され、意味および用法に渡って、新しい表現が編み出されることが分かった。それは、主に「もの遠し」や「もの深し」などに見られ、対象物に対する客観的把握から、主観的把握へ、さらに、人間の内面に対する把握への転換によるものであった。

第一編第二章では、「なまいとほし」のような接頭語「なま」を冠する形容詞を取り上げた。なぜなら、「なま」を冠する形容詞も、「もの」を冠する形容詞同様、源氏物語において、それ以前に比べて格段に多く用いられ、源氏物語の用語の特徴の一つに数えられるからである。それについて、『日本国語大辞典』の第二版に、第一版から接頭語「なま」の意味が修正されたものがあることに気づいた。そこで、源氏物語を中心に用例を調査し、これまでの接頭語「なま」の先行研究を再検討した。その結果、中古における形容詞に上接する接頭語「なま」は、下接する形容詞が表す状態には未だ届いていない意を表し、主に源氏物語において臙化表現として用いられていることを明らかにした上で、『日本国語大辞典』の修正に異議を唱えた。

第一編第三章では、源氏物語の文章の中でも、一文が長く、高度な連用修飾、連体修飾によって複文を作っているという特性に着目し、その文がどのような構造になっているのかを分析、解明した。特に、源氏物語には、「美しさ」のような形容詞の語幹に接尾語「さ」のついた語（以後「一さ」と略す）が、それ以前の作品とは比べものにならないほど多く見られることから、長い連体修飾句を冠する「一さ」に着目し、源氏物語における「一さ」の使われ方と、「一さ」を含む文の構造を分析した。源氏物語の「一さ」には、それ以前の作品には見られない新しい表現形式（出来事や行為とそれに対する感情を表した表現形式と、具体的な行為に対して人の性質を表す語を用いて批評した表現形式）があり、それらは源氏物語作者の工夫によるものであった。

第二編では、うつほ物語を取り上げる。

うつほ物語は本邦初の長編の物語であり、中古における物語の長編化の道を切り開いた作品であると考えられる。このうつほ物語は男性筆と言われ、従来、源氏物語とは全く性質を異にするとされてきた。特に、公私の行事描写が多く、催事の進行から人々の装束、賜禄に至るまで、余すところなく精写されるうつほ物語の記録的な筆致を、源氏物語が反面教師にして採用しなかった点などから、この二つの作品の文章は目指す方向が異なっていると考えるのが一般的である。しかし、うつほ物語の文章、特にうつほ物語に見られる自然描写と人物描写において、うつほ物語の文章を単純に記録的と割り切ることでできない描写に出会うことがある。記録的な筆致であれ、場面を描くという方法を獲得したうつほ物語の作者は、同じ場面描写を繰り返し描くことによって、物語中で徐々に文章表現に習熟していったのではないかと分かる。

のが、場面描写における形容詞・形容動詞の使用である。

記録的筆致で行事の様子を描いた場面描写ではあまり用いられなかった形容詞、形容動詞が、自然描写や人物描写では、しばしば用いられるようになる。そこには、場面を客観的に眺めていた語り手が、場面に参加し、そこに存在する自然や人物を感覚的に表現しようとする態度の変化が見て取れるのではないか。そして、このような主観的な描き方は、その後の源氏物語の語り手の態度へ連なるものと思われるのである。

うつほ物語は、成立事情や作者、主題や構造など、様々な問題を内包している作品である。文章の性格も一言で表すことは出来ず、様々な文体が混在している。源氏物語の文章を王朝物語の文章の到達点であるとする立場から、うつほ物語を眺める時、発展途上だと思われるうつほ物語の文章の内部に潜む変化が注目されるのである。

そこで、第二編では、うつほ物語の文章と描写方法について論じ、従来見落とされていたうつほ物語の文章の先進性と、源氏物語との近似性を指摘し、源氏物語を頂点とした平安の文章史の流れの中に、うつほ物語の文章を改めて位置づけた。

第二編第一章では、うつほ物語と源氏物語の自然描写を比較し、構図としての描き方、形容詞・形容動詞を用いた主観的な描き方、古歌を媒体にした主人公の心情と一体化した描き方について、うつほ物語と源氏物語の描写方法の共通性を探った。

うつほ物語に描かれた自然は、第一に、風景を作るという物語的手法で描かれている例があるという点で、第二に、作中人物の心情と結びつき、心情を象徴している例も存在するという点で、源氏物語との共通性が見られる。第一の物語的手法は、和歌や日記文学からではなく、同じ物語作品であるうつほ物語から源氏物語へ受け継がれたものであると言えよう。第二の自然を心情と結びつけて描く手法については、従来、古今集や蜻蛉日記が源氏物語へ影響を与えたと言われてきたが、この手法は物語作品においてうつほ物語で実践されていた。さらに、うつほ物語には、源氏物語に特有と言われてきた景情一致の自然までが見られる。自然描写に関してうつほ物語と源氏物語の距離は近いと言える。

第二編第二章では、うつほ物語の最後に位置する「楼の上」巻をとりあげ、形容詞・形容動詞の使用状況と使用方法という二つの観点から、源氏物語の文章との共通性を探り、そこに、うつほ物語の文章の到達点をみた。

男性の筆と言われ、源氏物語とは全く異なった主題、異なった文体で書き始められたうつほ物語。しかし、その最終地点において選択した文章は、形容詞・形容動詞の多用と、「形容詞終止文」に見られる叙述と評価の組み合わせ、そして評価を読者に共感させることにより、物事を描写していく方法だったのである。それは、源氏物語に代表される、女流文学が得意とする文体でもあった。うつほ物語はさまざまな文体を内包しながらも、最終的に到達した方向は、うつほ物語以降に続く、女流の物語の文章の方向と同じものであったということができ、ここにうつほ物語の先進性を明確に見て取ることができるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、源氏物語の表現の特徴を明らかにし、先行する宇津保物語の表現とどのような関係があるかを探った論文である。源氏物語は大部な作品であるために、源氏物語全体を扱う研究は労力を要する上に、源氏物語の六割ほどの長さをもつ宇津保物語の表現と比較してゆくのには、極めて大量の基礎作業を前提とするため、たいへん時間のかかる研究である。このテーマを選んだ著者には敬意を表する。

第一編では紫式部がどのように表現を工夫して、源氏物語の世界を作り上げたかを明らかにするために、形容詞・形容動詞の使用方法を分析している。もともと源氏物語は形容詞・形容動詞を多用していることは明らかにされているが、著者は、その中でも、形容詞に「もの」が付いた「もの形容詞」、「なま」がついた「なま一」、「さ」のついた「一さ」形式のものを精査し、さらに情意形容詞（多くはシク活用形容詞）と状態性形容詞（多くはク活用形容詞）に分けることによって、先行の散文作品とは違った分布をしていることを明らかにした。特に状態性形容詞を多用するのは、源氏物語の特徴であり、源氏物語ではじめて使用された「一さ」の形式は、すべて状態を表す形容詞であることを統計として示し、これが源氏物語の表現を特色づけていることを論じた。形容詞の形式と形容詞の意味とを相関させて、表現の特色を抽出するというのは、著者の工夫で、見事に源氏物語の表現法の特質を指摘したものである。

「もの一」形式は、紫式部が人間の内面把握のための新しい表現として利用したものであること、「一さ」では、感情を表すものと人の性質を表すものの二種の表現形式が存在しており、「一さ」を修飾する連体句が非常に長くなっていることを明らかにした上で、感情を表す「一さ」は長い連体修飾句で示される出来事・行為に対する感情を表現し、人の性質を表す「一さ」は、その行為を行った人物に対する評価・判断を表現していることを示した。そして、この表現方法は、式部が作中人物を精彩に描くために創出した散文技法の一つであると結論する。

言語表現は個人が創出したといっても、読者の理解範囲内でなければならない。式部の創出した表現方法も、それを理解し、新しい表現として歓迎する読者が存在していたと思われる。そこで、第二編では、源氏物語に先行する散文作品の中、従来から関係が取りざたされる宇津保物語との関連を探った。まず、宇津保物語の自然描写を分類し、作品にふさわしい風景を作りあげる物語的手法や作中人物の心情を象徴的に表現する例を示し、それが源氏物語の特徴とされた自然描写と共通しており、宇津保物語と源氏物語の自然描写が近い関係にあることを論証した。次に宇津保物語の中でも、最後に近い時期に書かれたと思われる「楼の上」の表現を分析し、形容詞・形容動詞が多用され、情景を通じて語り手の感覚までもが書き込まれており、源氏物語の特徴と言われた表現方法が、すでに使われていることを明らかにした。男性の書いた宇津保物語と女性の書いた源氏物語とは、内容面でも文体面でも異質とされていたが、宇津保物語の最終的な段階では、女流文学の文体にまで至っていたと結論する。

この成果は、源氏物語の文章が、その時代の表現を基盤としていること、自分の描きたい世界を表現するため、式部自身が工夫を加えていたことを明らかにしており、源氏物語の文体研究を大きく前進させた。

以上のように、本論文は、源氏物語の表現の特徴とその背景を探るという意欲的な論文であるが、用例の解釈などにはまだ修正すべき点も残り、形容詞・形容動詞以外の表現の実態分析による傍証が欲しいところである。しかし、源氏物語を中心とする王朝文学の表現論的な研究は、清水好子、渡辺実など、本研究室出身者が進めてきた研究であり、三世代目にこの研究を引き継ぐ研究者が育ってきたことは、たいへん喜ばしいことである。ますますの研鑽を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2010年1月15日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。